

## 北日本新聞 創造の森 越中座

正会員 米田 浩二 君  
正会員 相原 幸一 君

この建物は北陸に拠点をもつ地方新聞社の印刷工場である。明治の発刊以来 1 日も休刊したことがないという。地方新聞は中央の新聞社とは異なる、地方独特の読者との文化的、精神的なつながりというものを持つという意味で情報産業ということだけでは説明できない存在であるということはこの建物は表現している。 県庁所在地にあった印刷工場の機械設備の最新鋭機への更新、 郊外の田園風景がまだ残っているものの古くから人々が生活してきた文化が残る場所での建築の企画、 工場の合理性と文化施設としてのデザインと周辺環境への対応という大きな三つの問題に対する建築的な解答としてのバランスをまず評価した。

工場は本質的に印刷業務の合理性の追求と持続性のための耐久性について考え得る限り、無駄がなく、安価でしかも強靱なシェルターとして、建築的には見えないさまざまな工夫の積み重ねの上に成立した説得力のあるデザインである。特に正面ファサードのデザインにおける工場への吸気処理などに同種の工場の今までのデザインの蓄積がさりげなく表現されている。

文化的な施設としての新聞博物館や工場見学のルートや文化イベントのための集会機能の空間的、機能的には無理のない説得力のある処理がなされている。また新聞印刷という持続的な維持力を要求される事業を驚くほどの少人数で運営するための最新のロボット技術から運営する従業員の休憩所の丁寧な作り方まで幅広い要求に対するバランスの良い設計の配慮をみることができる。工場としての合理的強靱さを内包し、かつ地方都市の文化的建築としての空間的有り様を提示しているという新しさも実現しているといえるだろう。

地方都市の周辺の地域に対して建築が何を寄与できるのかということの評価するとすれば、この建物が防災的な拠点としても将来機能する可能性があるということにもみられるように、地方都市における新聞社の役割というものの建築における、実現の一つの典型的な建築ということで評価すべきものがある。また周辺の環境と建築との関係も多目的に使える外部デッキや外部の廊下を通じて庭園と建築との関係をつくりあげる日本的とも言える空間もさりげなく実現されている。

この建物は中庸という言葉の良い意味での建築の質に対する保証を提示しながら、地方の情報産業としての企業が現代において、これからの持続的な役割を建築として提示する時の典型的な一つの建築を提示していると考える。地方文化のこれからの文化産業の可能性を切り開くために、建築が何を寄与できるかという期待をこめて評価する。

よって、ここに作品選奨を贈るものである。